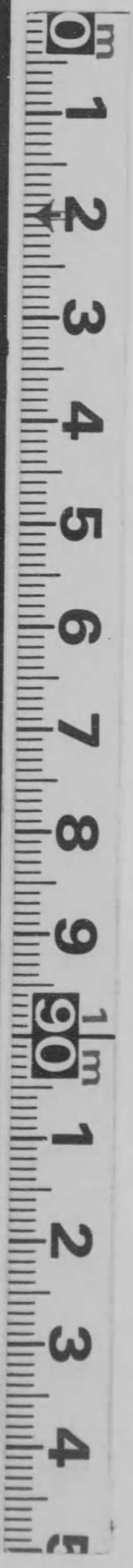


389  
87



始



4

389-87

泰西詩人叢書

第五編

木才全集詩集

佐藤英一譯

在田稠裝幀

聚英閣

大正

12.7

交文

## 譯者の言葉

ボオの詩なんか譯せるものではない。とは彼の詩を読んだとき思つてゐた。それは、彼が、いかにも英語の妙味を巧みに使つてゐたこと——彼が英語の精靈そのもののやうな詩人であつたことによるのだが、ではなぜ、その不可能をやつたのかといはれれば答へがない。

僕はボオの詩がすきだ、で、何をするにも興がむかぬとき、彼の詩の印象をも一度辿つてみるつもりで、書き始めたのが、私もつてゐるマクミランのポケットクラシックのボオ詩集、全部に

わたることになった。一通り出来上つたのは昨年の夏であつた。勿論嚴密な翻譯のつもりではないので詩壇に問ふ氣などは毛頭ないが、モーノの必要があつたので、聚英閣主人、後藤氏に、はかつてみたところ、是非「叢書」の一つに入れようとのことで、出版することにした。

ボオに關する紹介は近年いろいろの方面でされてゐるので今更らその必要はなからうが彼は近代詩の父といふ意味で、詩の初心者がどうしても一度は眼を通しておかなければならぬものである。そんなわけで、僕のこの著書は年少詩人がボオの門をくぐる動因を與へれば望外である。

おはりに、僕が暇がなくてできなかつたボオの詩論を紹介して

呉れた友人、春山行光にここでお禮を申す。

一九二三年五月十九日

尾張なる故郷の家で

佐藤一英

目次

序

献詩

×ある人に――	三
×ある人に――	五
×ある人に――	七
×レンの君に――	八
×樂園のなかのある人に――	一〇
×エフなる君に――	一三
×エスオーさいへる君に――	一三

× (エフなる君に).....二五

× エム・エル・エクス・いへる人に.....二六

× ある人に.....二八

× ヘレンの君に.....三三

× 謎語.....三九

× ザレンタイン(ある人に).....三三

の母に.....三三

希望と悔恨

× メメルラン.....三七

夢.....六一

夢のなかの夢.....六四

ある夢.....三七

幸福の極みの日極みの時.....三九

× のイスラエル.....三三

× 黄金郷.....七六

死

死霊.....八三

× 海中都市.....六六

× 眠れるもの.....九七

× レノア.....九八

× 勝利の蟲.....一〇二

× 大鴉.....一〇七

ウラリユーム	一九
ナンニイゆゑに	一九
アナベル・リイ	一四〇

瞑 想

× 明星	一四七
スタンザス	一五〇
湖(ある人に)	一五四
ソネット(科學に)	一五七
ロマンス	一五九
河に	一六一
コリシユム	一六四

讚美歌	一六九
ゼエントに	一七一
婚禮の唄	一七六
沈黙	一七七
ユーレリイ	一七九
○ベル	一八二

幻 影

アル・アラフ	一九五
精靈境	二三八
落ちつきのない谷	二四三
× 寤宮	二四六

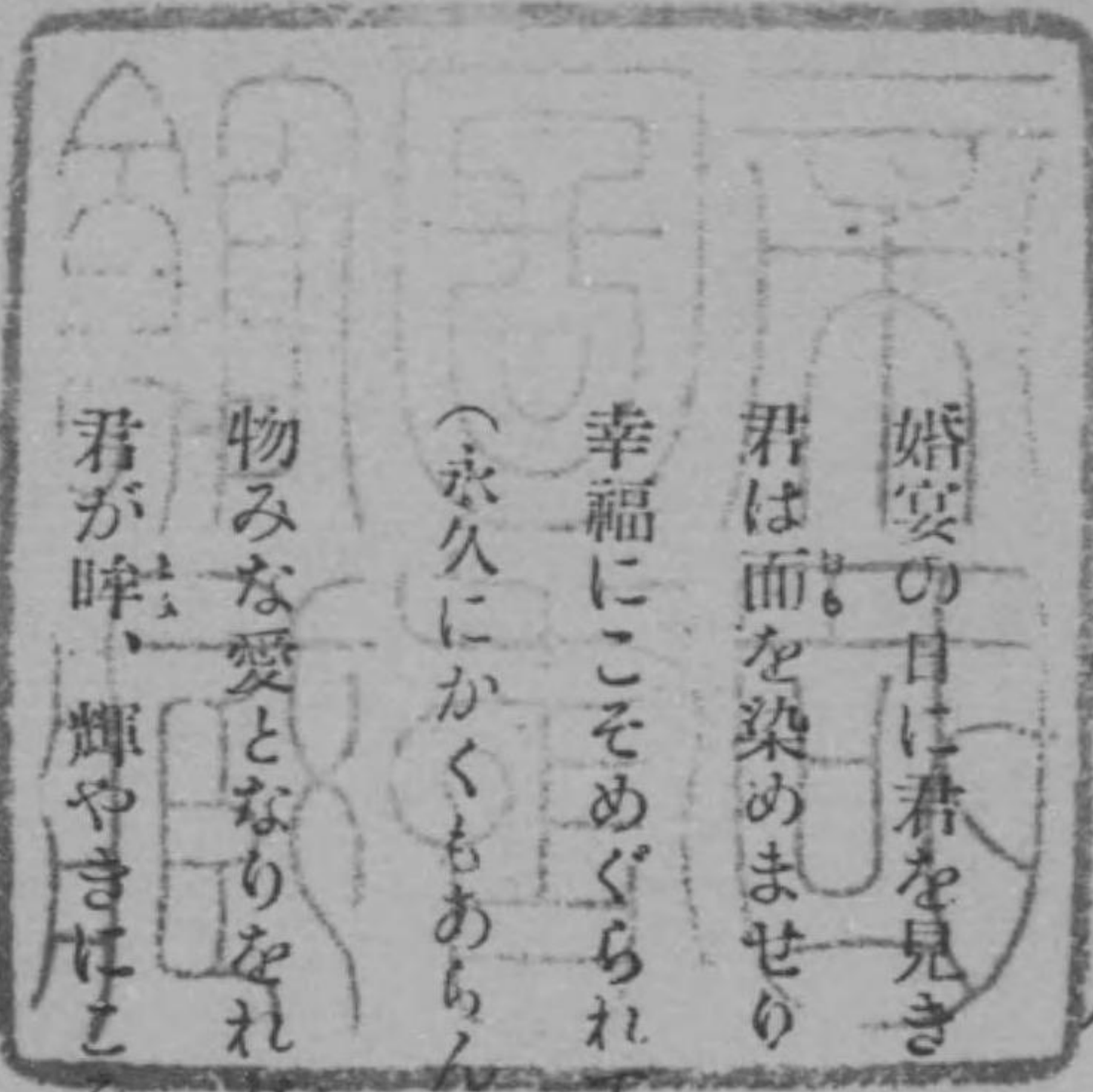
獻  
詩

夢境  
拔文

春山行光  
三



ある人に――



婚宴の日は君を見き

君は面を染めませり

幸福にこそめぐられて、

(永久にかくもあらんか)

物みな愛となりをれど、

君が眸、輝やまほそ光りしが――

地のものはみな、わが心、傷みてあれは

わづかにもうちみたるのみ、

その紅の面はそも處女のはじらひ、

かくありて失せもやすらめ、  
よし夫の胸もえたとす火となるも  
はかなきものぞ！

婚宴の日には、はゆくも

君が面朱走しるあるも

幸福にめぐらるるとも

なべては愛と見ゆれども、はかなきものぞ！

### ある人に——

かづかづの夢のなかにて吾れは見き

あづまやありて、名も知らぬ鳥うたひけり、

その唇ぞ——なべては君の調あり、

君が唇もれし言葉の——、

君の眼は心の宮の心かな

かなしけに落つ

おお神よ！とむらひの心の上に、

池の上の星影のごと——

君が靈、——君がみたまよ  
吾れ眼ざめ嘆きてありき  
あだし物あがなふ黄金あたひなき、  
まことの日まで夢みんと、さて眠りにき。

ある人に——

かすかなる恵もうけぬ  
地の上の運命なる吾れ  
なんすれぞ！幾年の愛は濁みぬ  
いまはしき瞬きの間に、  
なげきはあらし、寂寥の徒も  
吾れにもまさり幸多くこころよくとも。  
過ぎゆくもののが運命——  
君あはれみを給ふとも。

# Cho! Sole

吾れをおくりて歸らする  
 さかへしギリシヤ、華のローマに。  
 あなや！かなたの輝やく壁龕、  
 お身のいかに像のごとくに立てることよ！  
 お身の手には瑪瑙のランプ、  
 ああシイス！聖き郷より  
 お身は來りしー！

*Am-pa*  
*Am-pa*  
*Am-pa*  
 かなたの輝やく壁龕  
 お身のいかに像のごとくに立てることよ！  
 お身の手には瑪瑙のランプ  
 ああシイス！聖き郷より  
 お身は來りしー！

# Mio

## ○ヘレンの君に

ヘレンよお身の美しさ  
 昔時のニケアン、パークスのごと  
 香りただよふ海こえて  
 いといと靜かに疲れあぐみしさすらひの  
 身をふるさとの岸によす。  
 望みたえたる海原にただよふも憂き、  
 美はしき髪、みやびの顔や、  
 はたナイアドの歌聲や、

## 樂園のなかにある人に

いとしの人よ、お身こそは吾れにとりてぞ凡てなり、

お身がゆえ我が靈の病めるなり——

愛しの人よ、綿わたつ海みが緑の小島

美はしき木の實や花のたゞなかに

一つの泉、一つの社、

なべての花はわがものなれど、

消ゆるといふに輝やく夢よ、

ああ星に似る希のぞみのいろよ！

來ると見れば消えうせぬ！

未來のなかより叫びぞ擧がる

「先へ！先へ！——遂に過去とはなりにけり

(仄暗き深淵！)おしだまり力もうせて、

ほのかにもさまよふ吾れが魂よ！

悲しいかなや、吾れもとも

生命いのちの光ぞ飛び行きぬ

「歸り來らじ——再びと！——」

(寄せくる海の巖かさ

岸に砂食む言の葉ぞ)

花は咲んか夕立ち木、  
また、揚らんか傷つける鶯！

わが生涯はあだなりき  
夢多き夜のわが夢と  
つねに輝やく君が眸、  
君が歩みのいろどりや、  
み空の舞の足なみよ、  
いかに變らぬ流れにぞ。

### エフなる君に —

愛しの者よ！地の道に群がり集ふ  
いと暗き涙のなかに

（ああ物凄き道なるよ！ただ一輪の  
ただ一輪のバラもなし）—  
さるを遂には心安らふ

数々の君が夢に、そがなかにこそ  
安息のエデンの園をみ出でけり、  
思ひいづれば君かくて、

心おどらす、遙るか遙るかの離れ島、  
みだるる海のたどなかに——  
海は嵐に泣きさげび

はて知らねども——みよ空を  
ゆるぎなく、さゆるぎもなく  
うちつづく、輝やく島のほほえみに。

エス・オー——いへる君に（エフなる君に）

君は愛をばうくるらん？——されば君、

君がこころを守れかし、その道をこそ一すぢに！

君あるがままなる故に

君にしあらぬものと移るな、

かくて世に君がすなほの辿り道

君が優雅、美より優れる君が美も

ともに極みのほめたたへ、うけもやすらめ、

かくて愛、——こは變りなきつとめなる！

エム・エル・エスといへる人に

曉のごと君のきたるを待てる人——

その人々は君在さねば夜よるになん、——

高き空よりあふれし穢れ

はた暗き陽ぞ——人々は皆嘆きつつ

ああ君たたふ、晝となく、夜となく——望みまた生命いのちゆゑ！

なべてを越えて、まことなる、道なる清き

深うづもれの信をまた、よみがへらさん——そがために、

望みたえにし穢の寢床、そが上にこそ人々は、

伏しつ、冥府に入らんとき、もろき響の言葉あり

「光來れよ！」忽ちに彼等は立てり

そがもろき響の言葉、大空の

君が瞳を降りけり——

人々は君をいただくなかにして、そが報謝

ほめたよへとも異らず——胸にこそ刻ほれ

そがまこと、そが熱き熱き情こころを、

また思へ、これらはかなき言言ことばをしるせし人を

しるしつ、己おのが靈たま、天使の靈とかよへるを

感じつ身をば顛はしぬ！



ある人に

智力の激しい矜のうちに、

文人がこの文言をしるしたのは、

そんなに昔のことではない(言葉の力)と――

これは人の唇に響く前に人の胸に

思想が起るといふのを破つた――

そして今この矜りをば笑ふやうに

二つの言葉――海の外の柔かな音のない二音――

イタリヤ言葉は(ヘルモン山におちる露

眞珠のくさりのやうな月の光の露の)

夢のなかでただ天使らが唄ふようにと作られたのが、

文人の胸の淵から湧きいでた、それ――

思想でないやうな思想は、思想の魂だ、

豊かで廣々と、ずつとずつと聖い夢だ、

イスラエル天使の琴弾き、その唄よりも

(それは神の被造物の最も 스위트な聲の持主)

だが僕は！ 僕の文字はこはれて了つた、

ペンは僕のしびれた手から落ちて了つた、力なく、

聖書にある、貴方の親しみ多い名は貴方が教へて呉れたけれど、

僕は書けない——言ふことも——思ふことすら

ああ感ずることすら、それは感じもできないものだ、

夢の門の開け放された黄金の敷居に

氣力なく立ち、華麗やぐ並樹を

魂もうせて眺めつ、右や左や、おののきつ、

その道にそひ、くまなく見入る

紫かすむ、はるか遠くの絶景を——

そこには君が一人きりゐる、

## ヘレンの君に

君を見たのは——數年前に——ただ一度、  
何年前とはいはれないが——そんなに昔のことではない、  
七月のある眞夜中のことだつた、満月は、  
大空を、君のまことの靈に似て登りつつ、  
その行く道を急いでゐた、  
ひっそり閑と熱氣と眠氣は、  
月より落ちる光の銀の絹のヴェルとともどもい、  
百千の薔薇の花のあほむく顔に  
心を酔はす園に育つた花々の上に、

——風はなかつた、たゞ梢にのみ、——  
捨てられし薔薇のあほむく顔の上に、  
花々の香りに満ちた魂は、快き  
死のなかに愛の光に蘇生る  
その花々のあほむく顔の上に落ちる  
花萼の上には、微笑みつ死にたえてゐる  
薔薇の花、君ゆえに、君が來れる詩ゆえに酔ふ。  
葦草咲く堤の上に、君はゐた。  
純白な姿で半傾きつつ、あだかも月は、  
薔薇の花あほむく顔の眞上に、

また君の顔の上に、あほむける——ああ悲しげに！

運命ではなかつたらうか、この七月の眞夜中に、

運命ではなかつたらうか(運命、その名も悲しみだ)

それは私を園の門の前でとどめた

眠けなる薔薇の香を吸ふために？

ああ人の足音もない、穢れの世界は眠つてゐる、

吾れと君とを救ひ給へたど(おお天よ、おお神よ！)

どんなにか、抱きあひつゝ胸は言葉を叫んだだらう！)

吾れと君とを救ひ給へただ、私は息づき——私は見た——

忽ちにすべてのものは消えうせるのを、

(ああ心に留めよ、この花園は酔ひしれてゐた！)

眞珠のやうな月の光は消えて了つた、

ふつくらとした岸岸も、野を走つてゐる路もまた、

楽しさうな花々も、やきもちやきの立木らも、

もう何も見えはしない、あの薔薇の香でさへも、

空の大氣の腕のなかに死にたえた。

すべては——すべては消えうせた、君をのこして——、他は知ら

ず君はとどめて、

たゞ君の瞳の聖い光は消すな、

上眼づかひの瞳のなかの魂だけは、

それだけ見える——それは私の世界である  
それだけ見える——常に常に、彼等を残せ——

月が落ちて行くまでもそれだけ見えた、

この透き通つて光る天の球に、

ああどんなに野育ちの心の歴史がかかれてあるか！

どんなに嘆きの暗いことか！ どんなに望みの厳かなるか！

矜りの海のどんなにどんなに静かなことか！

燃ゆる願ひのどんなにか愛らしいよ！ さてどんなに

深いだらう、どうして、はかり得られようそれに映る愛の心願！

遂にいま、なじみの月は光を消した、

西の空の雨雲のなかに、

君は墓場の立木にまかれた幽霊となり、

迂り去つた、ただ瞳だけを残して、

瞳は去らない——いつまでも彼等は去らない、

私の淋しい歸りの道の夜をてらす、

瞳は去らない(私の望みのそのやうに)先き先きまでも、

瞳は私に従つて、——来る年も、また来る年も私を導く、

彼等は私の従者であるが——私は奴隷であるにすぎない、

彼等の住居は光の宮、明りの御殿だ——

私としては彼等の輝く光によつて救はれるのみ、

極樂の火花のなかに罪を消すのみ、

彼等は私の魂に満ち満ちてゐる美とともに（美は望みである）  
ああ、瞳は空にある——星だ私のひざまづく、  
悲しげに私の夜の眺めのうちに、  
たとへ光の白晝も、それらは見える、  
愛らしい二つの光る星々よ  
陽の光にも消えない星よ！

謎 語 (アン エニグマ)

ソロモン・ドン・ダンスは申す

『最も深奥なソネットのなかに

あるのもやつと半かけの理想、

吾等は之れら書き物のなかに、

ネエブルス・ボンネットに見つけるやうに

手つとり早くカスのカスをお目にかける！——

御婦人に一體何が出来ますか？

貴女様のベトラルカの駄作よりも

貴女がそれを習つてゐる間に

ふつと吹き込んだ柔毛の愚作が重いのである。』  
真正、正明、お天とさまは充分光る、

そんじよ、そこらのタツカマニチは

——見えすいた明後日剥ける偽をかく。

けれど、これだけ——諸君は信頼してもいよ、

確かなところ、中實ある不朽のものだ、これはみな  
織り込まれてゐる、愛すべき名の人の作。

ヴァレンティン（ある人に——）

彼の女の爲めにとてこの唄は成る、

レダの雙子のやうに輝やくその瞳、

明らかな瞳は己れの名を見つけよう、

あらゆる讀手に秘められてある頁の上に、

念入りに行を追へよ！ 行に隠さる

聖らの寶——護符と——魔除けの符——

これらは心につけねばならぬ、

よつく探れよ、調子を言葉を音節を、

つまらぬ個所ものがしてならぬ、のがせばすつかり駄目になる。

けれどここにはゴードアン結ノットのやうな  
劔でなければ解けぬものなし、

たゞ讀手さへすつかり心を讀んでくれれば、

この紙にしるしたものは眼を輝やかし、靈たまに灯ひともす、  
秘されてあるのは雄辯な言葉の二三、

——詩人の耳には度々きこえた——

詩人によつてそれはかかれた——

その名が詩人の名であるやうに、

騎士のピントーメンデ・フェルデナンドのやう、

この文字を眞まことそつくり、探ぐることをお止めなさい、

貴方にこの謎は解けない、どんづまりまで骨折つても、

## 母に——

天つみ空で天使らは耳うちしつつ、

燃えるやうな愛の日課の眞中まんなかに

(母)の愛ほど信深いものはないと

——いふことを知る我が胸もかゝる思ひに、

この親しみの深い名に貴方を呼んだ長い間、

貴方は私に母以上のものである、

死が貴方をおく心のうちの私の心に住んでゐる、

貴方は私のヴァジニアの魂たまを放つた。

私の母よ——實の母はずつと昔になくなつてゐた、



——けれど私自身の母だ、

また貴方は私が深く愛する人の母である、

がそれ故に私が知つてた母よりもなほ親はしい、

無窮のものである故に、この無窮こそ、

己れの魂よりも私に、私の妻も親はしい。

## 希望と悔恨

タメルラン

死に行くときのやさしい慰め！

父よそれも(今は)私にかゝりはりはない——

狂ほしく思ひめぐらすことはしない、

地上の力が罪から私を救つてくれると

この世ならぬ誇に酔ひしる——

恍<sup>まぼろし</sup>ける時や夢みるときは私にはない、

君はそれを望みと呼ぶか、—— 焔の焔と！

それは希<sup>ねが</sup>ひの苦痛ばかりだ、

願ふなら、——おお、おお、神よ！ 願ふなら——  
君を馬鹿とは呼ばないだらう、老いた人よ、  
けれどこれは君の賜ではないのだ！

靈の秘密を君は知つてゐる、——  
野の誇から恥へとおちる——。

ああ、憧憬<sup>もてが</sup>れる、こがれる心！ 名譽とともに、  
凋れ行く君を繼いだ、凋れ行く  
榮譽はかつて輝やいてゐた、

私の王座の寶石のなか

地獄の陽の暈！ 苦痛によつて

地獄は二度と私に顔へを起しはしない  
求める心よ、失した花や  
さて夏の日の陽の輝やきを！

死んだ時の死なない聲や、  
極みをしらぬ鐘は響く

呪ひの靈

君の空居のその上に——鐘は鳴りでる、  
私はいつも今のやうではなかつたのだ、  
額に輝やく王冠を

求めて終に篡奪した——

この暴悪な繼承は

シーザアにローマを與へた——そのように？

王の心の繼承や

誇の胸は人の情なまけとともどもに、

勇みに勇んで戦ふた、

山上に私は最初の生を送つた

タグレイの霧は夜毎に、

私の顔に露をおいた、

それ故に私は信じた

空の大氣の羽うちや騒騒しさは、

私自身の髪の毛の中であれると、

夜更けまで空から——おちる——その露は——

(聖くない夜の夢に)

私の上へ地獄の火とともにおちる

雲から光の赤くきらめく

それは旗が落ちるように、

半開いた私の瞳に表はれる

王の美観、

深い深いトランプットの夕立ち鳴り

急ぎ迫つて私に語る

人の争ひ、それは私の聲であるのだ

おお馬鹿な兒よ、自身の聲だ！

(私の心がおお、どんなにか歡ぶことか  
叫びによつて波うつことか)  
戦ひの勝利の叫びはおどり出る！

覆ひもない私の頭に落ちてくる

雨——さては強風

私を狂はし、耳をふたぎ、<sup>まくら</sup>盲にする、

私は思つた、人ではないと、

私の上に桂をおほふは、

冷たい風の突貫やまた混亂が

耳に高鳴る——王位の破壊、

——捕虜の祈禱——

嘆願の轟々たるや——さてはまた、

王位をめぐる、へつらひの聲のさわぎよ、

わが情熱は不運の時に

専横権を勝ち得たのだ、

それは人が夢みたものだが私は力を内に得てゐた、

わが心内の自然——それだ、

けれども父よ、子供の頃にある人あり

彼等の焔が静かな烈しい育ちとともに燃えたとき、

(情熱は若さにさわいだ)

たとひ、彼等が、廢頰の女のなかに  
鐵の心があるのを知るも、

ああ私には語るべき言葉がないのだ、——  
語るべき愛人の愛！

いま私には描けはしない

私の心に、ある人の顔の美にまし、

その顔の美よ

變りやすい風の上の影、

私は昔の教訓せきんの書物の

ページの上は記憶にない

眼を走らすも——文字をよむまで、

——意を解するまで——夢にとけ入り、

——何もわかりはしないのだ、

おおすべての愛にすぐれた彼女！

愛はもとは我がものだった——

空の天使の心のように、

ねたまれる筈、彼女の若い心の上、社の上に

数々の望みや想ひを

焚き香らした——いゝ賜だ

子供のやうに、生一本で——

まぢりつけなく——彼女は若い模範である、

それを何故に私は離れてさまよふた  
火におほれ、光追ひかりひつも？

私等は年とともに大きくなり——愛した——互ひに——  
森のなかや、さては野原をさまよひながら、  
冬の季節私は胸で彼女をおほふた、  
親しげな照る陽の光が微笑んだとき、  
彼女が空のカラツとしたのを指したとき、  
私は彼女の眼のみをみてゐた——  
青春の愛するものの最初の課業——その心、  
陽の光こほれるなかにさては微笑に、

無頓着にも私は彼女を

その娘らしいたくらみを笑つたけれど  
私は彼女の波うつ胸に身をよせた、  
そして涙に心はしたつた——

この上何を語るがいるか

彼女は何にも言はなんだ、  
だがその静かな眼の光をば私に投じた。

愛よりも一入優れ

わが靈がそれと争ひもつれ合ふた、  
山の上の淋しい峯で

野心はそれに新らしい音色を添へた——  
私は生を有してゐない——ただ君だけだ、  
それで世界はすべてをおさめる  
地のなかに——大氣のなかに——海のなかに——  
その歡びに——悲惨なあはれな運命に——  
それは新たな歡びだつた——希ひだつた  
夜の夢の、灰暗い空望だつた——  
何物でもない薄闇である——これは眞に——  
(影か——影にも増した影ばむ光である!)  
灰暗い翼の上に別れてきた  
そして亂れ、こんぐらかる

君の寫象、——一つの名、——たゞ一つの名!  
それは二つに分れるが——けれど最も親しいものだ、  
私には野心があつた——知つてゐますか  
父よ、その情熱を知らないでせう  
小屋が私の玉座であつた、  
世界の半分が私のもので、  
あんな低い運命を私はかこつた——  
けれど何か他の夢に似て、  
露の香の上を私自身のものは行きすぎた。  
美の光線は二重の愛で



私の心をおさへなんだ。  
それは分を、また時を、  
さては日をばくぐつて行つた。  
私等は共に山の峯を歩いた  
それは誇に  
はるか岩や森の造る  
自然の塔を見下してゐる丘の上に——  
瘦せた丘だ！ 亭にまかれて  
限りも知れない流れも叫ぶ、

私は語つた力と誇の彼女に向つて

けれど不思議だ——瞬時の會話に、  
彼女は何にも思はぬような  
——そんな様子だ、——私の無注意、  
私は讀んだ彼女の瞳に、  
私自身の心と彼女の心のもつれを——  
彼女の輝やく頬の血潮が  
私に女王の王座を談る  
私が願ふたものに充分  
それは野のたつた一つの光である、

私は自身を華美に装ひ

幻の衣類をかついだ——

けれどそれは夢が彼女の外套を

私に着せたものではない——

だがそれは俗衆どもにうちまぢり、

繋がれた野心の獅子だ——

番人の前に膝折る——

例へてみれば荒蕪地に

廣いあれたおそるべき

己れの息で焔をあほぐ反旗ではない、

サマルカンドにいま君をみよ！

彼女は地上の王であるか？

すべての都市を越えて立つ彼女の誇？ 彼女の手には

都市の命運？ 全世界の知る光榮に

獨り氣高く彼女は立つか？

彼女の彼女の踏石は——落ちて行きつつ、

ある王座の臺をつくらう——

彼女の主權は誰である？ チムール、彼を

人はおどろき眺めてゐた

剛慢に王位を乗りこえ進むのを、

王位を冒した無法者を！

おお人間の愛！ 君は與へる靈を  
地上に吾等が望むすべての天の心を！  
それは心に雨のやうに降りそそぐ、  
シロツコの枯れた野邊の上に降る  
君の心に暝福となり、しほれ行く  
だが心には野情をのこす！  
おもひよ！ 君は生をめぐる  
奇妙な響の音楽で  
生誕のひどく原始な美によつて、  
さあ告別！ 私は地上を勝ち得たのだ！

「希<sup>か</sup>み」高く飛び揚る鷺は眺める  
けれど空の行手には巖はみえない  
力なく翼はたれて——  
柔らげる彼の瞳は家路をみかへる  
日暮れである、陽は間なく落ち行くだらう  
そして彼には心の悲哀がよせてくる  
彼はなほ、夏の輝やく  
太陽をみたく思ふが、  
その靈は夕方のあんなに柔らかな  
霧をきらふて  
迫る暗の音をきき入る

(破れた心がそれを知つてる)

夜の夢の人のやうだ、飛べはするが、  
危険から少しも遁れる事はできない。

月影に——その光り月の光は

彼女の晝のすべての美をば覆ふてる。

彼女の微笑は凍つてゐる——彼女の光も

身顛ひの時(それは一度<sup>ひまたび</sup>)

君が、君の息のなかに集めるやうに)

死んだ後でとられた像となるであらう

子供の時代は夏の太陽。

その老筆は物凄しい陽だ

私等の生は既に知られたことを知るのにある、

消えたものを守らうともとめるだけだ、

わが生を晝間の花のそのやうに、

晝の日の美とともどもに沈ませよ——それきりだ、

私は私の家に着いたが——私の家は影もみえない

私の拵へたすべてのものと同じ命に消えうせた、

私は昔のむしてゐる戸口をすぎた、

ごく低くごくごく静かに歩いたけれど、

或家から、私が前から知つてゐる

敷石よりは聲が起つた。

おお地獄、私は君にむきつけよう

焼けおちた焔の床に、

破れた心を、——深い嘆きを。

父よ私は確信する——

私は知つてる——やがて死が私にくると、

遠いめぐみの世界から

そこには欺瞞のなにももない

鐵の門扉が半開いて捨てられてある、

君はそれを見ないけれど眞の光が

永遠を通して耀きらめく世界である——

私は信ずるエブリスは

何人の道の上にも畏をかけると、

なほ聖い偶像の森を歩けば、

愛人よ、それは日毎に、

その雪白の翼を香らす

人が捨てゝみかへりもせぬ物よりもなほ

燃えた供物の香とともに、

その楽しい私室は破れる、

はるか空より格子かろうしじま縞の光によつて

息はしい微塵もなくて——小蟲も飛ばず——

驚の瞳のその耀き——  
よぢり昇つた野心のみえず、  
どんなであつたか騒ぎのうちに、  
明らかに育ちおふまで彼は笑ひ跳びはねる、  
愛人のその髪の毛のうづまくなかに？

## 夢

おお曾ての若い日日は最後の夢だ！  
その夢はさめはしない、永久まはの明りが、  
朝をともし來るまでは！  
さうだ！ 夢が長い夢がすっかり悲しいものであつても、  
醒めての日の冷たい生より  
はるかよかつた、今もなほ、楽しい地上で、  
生れるとから深い心のみだれがあらう、  
とことばに夢はつづかう——夢はあらう  
とことばに、いとけない日の夢のやう

——その頃の夢のやうにあるだらう  
天つみ空の望みの故に聖らであらう、  
夏の日の空、陽が輝やかに、生ける光の、  
また愛の夢に深くもおほれてゐた——  
そして心は想像の國にあそんだ  
私自身の家より離れて、心に住める人とともに、  
——おおこれ以上、何を私は見たであらう？  
かつて、かつてただ一度——記憶から  
手ざはり粗い時間は消えない  
何の力か、何の呪咀か私の心をしばつてゐた、  
——真夜中冷たい風が襲つた、

そして心に影を残した——また月は  
彼の女の<sup>ツミ</sup>高殿<sup>たかどの</sup>にあり眠る私を照してゐた、  
過ぎる冷たさ——星々も——けれど、けれど、  
夢は夜風のようにあるとも——すぎ去れよ、  
ああ私は楽しかった——夢ではあつたが  
楽しかった——この題目を愛するよ、夢！  
生の夢の生々とした彩りには  
幻の風のやうな、影のやうな、霧のやうな努力にも、  
心しびれた瞳の上に運ばれるまことがあるやう  
樂園の神めいとしの種々<sup>しんしん</sup>あり——これらすべて  
吾らのもの——白日の若い日日の望みにもまし、

## 夢のなかの夢

額にキスを受けたまへ！  
別れといへば聞きたまへ  
かすかすの吾が胸の思ひを、  
すぎた月日が夢であつたと  
思へる君よ、あやまりでない、  
だのに望みの一日一夜に、  
はた幻に、さては空しく、  
飛び去るときになほもまだ、  
消えた價のないものと

呼ぶてよいか、人の見る

また見たものは夢のなかの夢にすぎない、

波打ちよせる岸邊に立ち  
その苦しげな叫びのなかに、  
てのひらに、握れば空し、  
あめいろの砂のいくつづ  
空し！ 消ゆる指の隙より  
深い深い海のなかへと  
束の間の涙のうちに  
おお神よ、たにぎらしめよ、



砂のいく粒、堅いにぎりに？  
おお神よ、救ひ得ないか  
情なしの波より砂の一粒を？  
吾がみてし、またみるものは  
みな夢の夢なるものを？

## あ る 夢

暗い夜、うつらうつらに喜びの  
かへつて来たのを夢にみた、  
けれどさめての、命の光の夢は私に、  
心のいたみを遺すばかりだ。

ああ！ 日の夢にすぎないだらう  
彼の瞳は周囲のものを射、  
一すぢの光とともに  
過ぎた時の脊に輝やくもの？

あの聖い夢——あの聖い夢、

それは世がすつかりすすり泣いてゐるとき、  
どんなに私を慰める

ひとりほつちの靈を道案内する光のやうに。

あれは何か、嵐のなかを、闇のなかを、

はるかはるか、顛へて流れてくる光、

まことの日の星の光に優ような、

聖い光があるものか？

### 幸福の極みの日、極みの時

幸福の極みの時よ、極みの日、

私のなえた、凋しぼんだ心もかつては持った

誇ほの、力の、高い望みも、

消えて行くのを私は感ずる、

力のとよ！ 私は言つたか？ さうだ！ さう私は想ふ、

けれどそれらは遠い昔に消え去つた、ああ！

若い日月の幻はいまだにつづく——

けれど行けよ、行けよかし、

誇よ、いましに、何かあらう、今となつては、  
よし、ある人の額はいましを迎へようとも、  
かつて吾が額に流れた害毒を、——  
静まれよ、吾が靈よ！

幸福の極みの時よ、極みの日、

瞳はそれを見るだらう——かつてのやうに、

誇の、力の、耀くまなざし、

それを感じる——かつてのやうに、

よし今も、誇の、力の、

望みが與へられようとも、私は感ずる

私は感ずる深いなけきに——かがやかな極みの時を、

その世界には二度と私は住めはしない、

その翼の上には暗い質があるから

そのへつらひをそのままに、

その質の髓は降つて、

知つてゐてくだである靈をうちくだく、

イスラエル



かくてイスラエルの天使——その心の糸は琵琶をなす  
——彼は造化の極みのらうたき聲を持てり

——(コーラン)——

天上に住んでゐる靈、

(その心のつる鳴れば琵琶の音響く)

イスラエル天使に似たる

ひろやかな、よい歌ひ手はない、

(傳へ言ふ)ちろめく星は

讚美歌をやめ、すつかり黙り、  
天使の聲の魅に近づく、

天上の高い極みに

さまよふ月の

その靈醉はす月は朱に染む  
胸の焔村に、

かゝるとき、耳をたむく、

赤らむ光は(プレイアツ

そは七體耀やきはすれ、

ともに)み空に聲をのむ。

(星々の唱歌隊や

聞手のものは)かくぞいふ——

かのイスラエルの胸の火は

七絃の琴の助けぞ、

かの琴に、彼れよりかゝり且つ歌ふ、

世にめづらしい絃のちつ

生々としたふるへをば、

かくて天使の踏んだ空は、

深い思想がおきてである、

愛は盛んな神である、

またホウリイの流し眼は、

吾等が星に讃へたる

すべての美にぞ染んでゐる

それ故お身は正しくある、

イスラエルお身はさけすむ、

激しい情のかけた唄を、

桂はお身のものである、

すぐれた詩人は聖者である！

お身は楽しく永遠に生きる、

空高い恍惚とする世界には  
もゆる調べが似合ひもの、  
お身の悲しみ、喜び、慊悪、また愛は、  
お身の琵琶の高熱がむく、  
されば星も、黙せるか！

さうだ、空はお身のものだが、  
甘美は酸のある世界、  
吾等の花は——ただ花だ、  
けれど、お身のまつたい慈悲みの影は吾等の

日の光である。

若しも、わたしが  
空へ行け、  
イスラエルが地へ降りるなら、  
彼はあんなにはろばろと  
地上の唄を唄はまい、  
けれど空では彼にもまして、  
強い調べが私の七絃琴から出よう！

黄金郷 (エルドラド)

まばゆくも飾りつくした、

剛勇の騎士、

日向を、陰を、

さまよふた、長く、長く、

歌ひながら

(黄金郷)を探ねながら、

やがては老いた

勇敢ながら

心の上に影が落ちた、

少しも見出だせなかつたとき、

わづかな天地も

黄金郷に似てゐる土地が、

かうして彼は衰へてゐた、

己れの力に、

さまよふ影に會つたとき

(影よ)と呼んだ

(何處にあるのだ

黄金郷は?)

死

(山々を越え

月に輝やく

「影」の谷を下りて行け

行け勇ましく)

影は答へた、

(若し君が黄金郷を求めらば?)



死 靈

かの仄暗き墓穴の暗き思ひに  
お身の靈ぞ自らをみん、——  
かくて衆愚はみるべくなし  
おみの秘密の奥所おくがをば、

静かになせよ、墓穴を、  
穴はあまりにさうざうし  
おみの前生ける姿に立てりしも  
今かおんみをとりまきて、

死せる姿にかへりたる  
靈ぞおみを覆はん、静けきぞよき、

清らなれども夜落ちて、

み空の高き玉座より、

人に望みを送るごと

光投げにし星暗く

——光もなくてたゞ真紅

おみはやつれて思ふらん、こは焔、

悪熱ぞわれに喰ひ入ると、

かくて真紅はいろかへず、

思ひぞおみをしばりたり  
夢ぞお身より去りがたし  
草葉の露のそれに似て、  
あまた靈は散りもせず、

静かなりけり寂として——

神のみ息か——そよかせか

霧はも丘に影さして破れるべくも非りき

死者のかたみか、おもかけか、——

木よりくだりて不思議なり、あゝ不可思議の極みなり！

## 海中都市

西の方、仄暗きあたりに眼を馳せよ！

淋しく臥せる不可思議の街、

死こそいまそが王座にぞ登りたり、

良きも悪しきも、善も邪も、

とことのはの眠りにつける都なり、

社や城や堂塔や、

(時虫喰めど、さゆるぎもなき堂塔や)

我が世のものにあらざりき、

つま立つ風も身をふせて、

仄暗き流れのやすむさま、

大空が下、静かなる……………、

み空より落ちくる光のあるべきや

都に夜の時長し、

たゞ此處ばかり光あり、青ざめはてた海の面、

音なく、光櫓に上り、

かなた(自由の)、

伽藍、尖塔、圓屋根に、

王城の間に、神廊に、

バビロン型の壁の上に

みかへるものもあらざりし、影ばむ四阿に  
常春藤や花にかざられて彫刻もあるそが石材に、  
限りもあらず大理石なまいしの社のうえに、  
ヴィオルや、すみれ、葡萄蔓、絡み合ひたる、  
小さき壁の上、上に、  
大空が下、身をすてて、  
仄暗き流臥しにけり、  
空にさがれる堂塔は、  
影とみわけぞつきがたし、  
かゝる折、死はいかめしく見下せり、  
街の塔の高きより、

扉開きし神廊や口開きたる墓穴は、  
海の光に浮びたり  
神々の像はあれども  
金剛石の瞳には富はあれども、  
さて輝やける死人等も、  
床より波を誘はず、  
小波もなし、あゝ寂し！  
玻璃なす海にうちそうて、  
はるか、かなたの幸の海、  
訪ふべき風も起るなし——

はたまた海のうらうらと、静けき上を渡りきし、  
風さへここには見えずりき。

忽ちに見よ大空に擾亂あり

海はかしこにゆらぎたり

塔はいま傾き行きぬ——

黒き潮にやゝ埋もれて、

そが頂き、わづかに天の

薄き覆を破りしごとく

かくて、今、海は怒るか——

時は青ざめ息をひそめぬ、——

地の上の惱みにあらぬそがなかに、  
都はたほれ、うもれ行く、深く深く、  
かゝるとき、千百の王座より立ち、  
地獄の思ふこれはみな神の御心！

## 眠れるもの

六月の眞夜中にして姿あやしき

月の下にぞ吾れ立てり、

黄金なる月の面よりたゞよへる

香知らずや露に似て、はた影に似て阿片の香、

静かなる山の嶺

柔らかに落ちくる露の滴あり

調べのごとく快く音をばぬすみて、

廣がるや、はざま、はざまよ、

迷迭香の花辨は墓にうなだれ、

百合の花辨流れにひたる、

そが胸のめぐりにまとふ霧みよや、

おくつきはいま音もなし

リーゼのごときさまにして、見よや世界に、

湖のうつらうつらと

眠れるや、はた眼醒むるや、眠るなり、

なべてみな美はしき人うまひしぬ、

見よや墓をば、空にむかへる窓ひらき

横はりたるイレエネを、さだめと共に。

おおイレエネは輝やけり！ そはよきか、

闇に開けるこの窓に、

みだらな大氣は樹の梢より、

笑ひつゝ格子戸の中に落ち込む――

形もなくて軽やかに群れをぞなして

おみが部屋、いでにつ入りつ、

天蓋に帳をゆする、

――はたはたと――またひそひそと

おみが眠れる靈がした

ふちとり確き蓋のうへ、

床をつたひ壁にそひ、

すだまのごとく通り行く、

さるをイレエネ愛人よおそればなきが、

おみここに何を夢みてしかるぞや

おみこそは遠き海より來しならめ！

黄金の木々はおどろきつ

奇しきよ、おみの青き顔、纏衣、

なべてにまさり奇しきはまき毛、靜かになべて嚴かなり、

姫は眠れり、おお眠らせよ、

終りなく、深く深く！

空は彼女を胸に抱けり！

部屋はかはれり聖らの部屋と、

寢所は一入物憂くなりぬ

神よ、彼女を眠らせ玉へ、

永久に眼瞼をとぢしめよ

かかる折しも仄暗き、衣の幽霊ぞ、はたをば過ぎる！

愛しの人よ、眠れるや、おお眠らせよ

終りなく、深く深く！

彼女のめぐり、めぐらせよ、柔らかに匍ふ蟲々を、

遙かなる年經し暗き森のうち、

彼女が上に丈高き圓天井をめぐらせよ——

そが天井は黒くして縁ある鏡板

翻へし、また翻へしたる、

親しかる彼女が大なるとむらひの

飾つける柩衣の上になびきし

人里離れし墓の上、

幼き頃に彼の人かむだ石多く投げたりし。

墓場の前に立てる戸に、その木靈さへきかんとせざる、

あはれなる罪の子供の、いまきくは、

奥深くうめける死者ぞ——

かく知りて身ぶるひなせる彼の人のため、扉をひらけ、



レノア

あはれ、こはれし黄金の杯よ！　とことわに流れ去る靈よ！  
鐘を鳴らせよ！——聖きみ靈は（死者の流れ）に浮びたり、

ガイ・ド・ヴェル——彼の女のラヴよ汝は嘆けるや——いまぞ泣

け——さに非ざれば永久に？

見よかなた、悲しき堅き柩の上、低くレノアは横はる！

來りて野邊におくれかし——とむらひの歌きかざるや——

かくも若くて死に行きし王姫にも似る死者の爲め、

歌ふ讚美歌、野邊送り、かくも若くて死に行きし、かくも急ぎて  
死に行きし

（心なき輩に告げん、汝等は清高き心を知らずして、彼女が富を  
追ひしのみ

レノア病ひに臥せし折、いまし等あけし祈さへ彼女の死をば早め  
にき！

さるをいかに送るとやこの野邊送り——その眼にて悪しき光の、  
さるを如何に歌ふとやこの死出の歌——その舌に、いつはり多  
き、

かくも若くて死に行きし、清きレノアの爲めにとて、

ああ吾れらこそ誤れり、心なき言葉なはきそ、かの死者に快き

ため、

サバツスの歌をぞ神に捧げなん、いと嚴かに、

レノアは既に去りにけり、のぞみに燃えて神のもと、

清き姿に輝やきつ、おみをはなれて去りにけり、

レノアには優美も笑みも去りやらず、底に伏すなれ、

黄色なる髪の上にははふ命いふち、されども眼には光なし——

いのちはなほもここにあり、清き髪の上——眼の上にごそ死は

伏すよ、

(去れよ、とく去れ、地獄より、いかれる悪鬼はやぶられぬ、

地獄を出でて空に入る、かしこに高き世界あり、——

なき悲しみやうめきより去りて、み空が王の下、黄金の王座に行  
きたりし、

鐘はな打ちそ、聖らなるめぐみに浴し靈は伏す、

レノアはきかん、歌聲を、咎めの土地にたゞよへる、

かくてああ、今宵我が心輝やく！ かなしき唄は、な唄ひそ、

古へよりの詩うたいだき彼女が、かろき翅の上、天つ使ひの浮ばせ  
ん)

## 勝利の蟲

さびしけな近き代のこと

そはさかもりの宵なりき、

みよ天使、翅おさめヴェルかつぎて、

群をなし涙にこそは暮れてけり、

希みやおそれの一芝居、

眺めてあれば小屋のうち、

オーケストラは調よく

天つみ樂ぞ奏でけり、

み空の神の姿にて、

がほそく低くささやきつ

道化役者ら飛びにけりここにかしこに——

彼等は靈もなき像ぞ、

さだめによりてここ、かしこ、

眼にしも得ざるなけきより

はけ鷹のはねうちならし

變へる場面もさだめにて、

色くさぐさの仕草なる

——まこと忘るることはなし

——まどひのうちを、またもとの

己が住家にかへり行く、

追ひても得ざる幻を、

追ふ群のあり、永久に

なげき恐れと狂ひ氣は

あまた仕草のみ靈にて、

あなや舞臺に、はひ出でる、

或る役者あり、

さびしき眺めのかなたより、

もがき出でたり血にそみて、

もがけり、もがけり、役者らは、

人のなげきとそが餌食なる、

さて毒虫の牙人の血深く染るみて、

天つ使は涙する、

灯せむしひ消えぬすべてみな！

ふるへおののく姿をば、

おほひつ下りつ覆衣カーテン

嵐とともに死者の衣きぬ

天つ使は青ざめて

ヴェルを落し、立ちあがり、

叫びぬこれは悲劇なり

(人間)の主人の役目、勝利の蟲、

## 大 鴉

或物寥い夜半のこと、疲れ心地に思ひをひそめる、  
忘れられた昔の奇妙な数々の書物の中に——

うとうととやがて眠りに入らうとすると忽ち響く、  
扉をうつ、部屋のドアを軽くうつ誰かのおとなひ、

(誰であらうか)ひとりつぶやく(部屋のドアうつ軽い音——軽い  
音の外はない)

ああ明きりと思ひ出す年のおはりの寒い夜、

消えるばかりの燃えくすの一つ一つが床板に不気味な影を投げ

るとき、

どんなに朝を待つただらう——悲しみをどうか消さうと、  
頁の隙をむだにさまよひ——失つたレノアの遺す悲しみに——  
二人とはない、かがやかな娘のレノア、天使らの——  
その名は二度とかへらない、

窓懸の絹紫の窓懸のサラサラと怪しくゆれて

心は縮む——常ならぬ此の世ならぬおそれは迫る、  
胸の鼓動、沈まれと、立ちて、つぶやく、

(誰か来てドアにノックの軽い音——  
誰かきてドアにノックの軽い音——)

ノックの音の外はない)

やがて心は力づき、まどはず今は呼びかける

(君よ、さては御婦人よ、まことにゆるせ、

貴方のノックが軽かつたゆゑ、まどろんでゐた、

部屋の扉に鳴る音がかすかに、かすかに過ぎたゆゑ、

私はまつたく氣付かなかつた、)——さて、廣々と扉開けば、

闇が迫つてゐる外はない、

瞳を闇に凝らしつつ、まよひつ、おびえつ立つてゐた、

生あるものが夢みない夢を夢みつ、うたがひつ、

長く静寂<sup>しじま</sup>はやぶられず、明りも影も表れず  
響くは一語、叫<sup>こゑ</sup>きの呼ぶ(レノアよ!)と——  
それは私の叫<sup>こゑ</sup>きがこだまに返す名の(レノア!)  
闇にこだまの外はない。

部屋にかへれば靈は焔とかはる<sup>えんえんと</sup>

再びきこえる扉の音、やや音高くコツコツと、

(何物か、何物か、わが窓に立つ)

何物なるか、確かめよ、この迷をば、解きあかせ

心よ沈まれよ、しばし、迷をとく間——

風の外にはなにもない

窓をはなてば、ばたばたと翼うつ音、ばたばたと、

古き昔の大鴉、威儀ある姿、聖らかに、

會釋<sup>えしやく</sup>もなくて飛び来る

貴女王侯もただならず、しばしは部屋を飛びまはり、

ヤムありドアの上に坐すパラスの像に静まつた、

聲なく立つて他事はない、

黒檀の鳥、いかめしく、威儀ととのへた、かほかたち、

姿み入れれば悲痛なる思ひも微笑にまぎらさる、

(お前の冠<sup>かぶり</sup>はきれてる、けれど夜の岸邊から、

逃げた魔性の昔の鴉でないだらう——

語れ夜の地獄の岸で名乗つたお前の高位を語れ！

答へに（またとかへらない）

おどろくことか、明つきりと、無様な鳥からきく言葉  
充分の意味なく——彼には似合はなくとも、

このよろこびを誰か知る、生ある人が、

その部屋のドアにかうして鳥をみる、——

鳥か獸か、彫像にとまれるもの

その名は（またとかへらない）

静かな像にとどまつて淋しい風情で言ふ一語、

ただの一語に、己れの心をこめて語るか、

何事もないそのあとは、バサと翼も動かない——

聲おとし私は語る（友は皆私を去つた、

彼もまた私を去らう明日の日は、数々の望みが去つたそのやう

に）

答へに（またとかへらない）

驚けば矢つぐ答へに静寂は破れた、

私は語る（疑ひもなくそれは不幸な主人から

奪つた一つの畜へ言葉、無慈悲な災鬼は



急ぎ迫つた、その唄に沈んだ叫びを返させる  
望みをおくる輓歌とし、沈んだ叫びを、  
叫び——（またとかへらない）

鴉はなほも微笑ます憂ひを消して、

私は扉に、像に、鴉に向ひつつ、床にうづまる、

ビロードの床に沈んで物思ふ幻の影より影へ、

この不吉なる前兆の昔の鴉、

瘦せて不様な物凄しい何をしらせる

叫び——（またとかへらない）

深く深く思ひに沈むが一語と語らず

いまや鴉の眼は燃えてらんらんと、わが胸の奥に照り入る

坐して深く冥想すれば快く

ビロードの褥に沈む灯にてらされて

濃紫、そのビロードの褥の上に灯は腹這ふが

レノアは、またとかへらない

気づけば大氣は濃やかになり、香はのほるよ、眼には見えない

香爐から、

香はゆれる天使らの歩むにつれて足音は床に唄ふよ、

哀れなる者自らに言ふ（神はお前に贈つたか、天使に命じ、レノ

アの悲しい記憶から休ませるため、  
おおのめよ、憂<sup>うき</sup>忘れ草<sup>くさ</sup>亡<sup>な</sup>きレノアゆゑ  
けれど鴉の答に（またとかへらない）

（豫言者よ！）さては（悪魔よ！——鳥か魔性が豫言者よ！）  
魔術鬼の送つたものか、さてはまた嵐にうちあけられたのか  
恍惚のここの荒野に、たゞ一人「おそれ」の住ふこの家に、  
氣強い貴様——まことを吾れに語れよ、語れ、——  
かのギリアドに香も同じ草やある？——語れよ、——語れ、  
答へに（またとかへらない）

（豫言者よ！）さては（悪魔よ！——鳥か魔性が——豫言者よ！）  
吾等をおほふ天により、吾等の崇める神により、  
悲しい重荷を負ふ胸に、語れよ、はるかのエデンには、  
天使の呼ぶ名、レノアなるかの聖けだつ娘なる  
かの二人ない耀やかな娘はるるかレノアは）  
答へに（またとそこにない）

（鳥か悪魔か、その一語、吾等を裂くぞ！）  
飛びあがり、私は叫んだ——  
（かへれよ、嵐のただ中へさては夜の地獄谷！  
貴様のウソの靈の表示<sup>しるし</sup>となせよ黒翼！

わが寂莫をさてはまた窓の像をゆるがすか！  
嘴をぬけ、我が胸の！ 姿を消せよ、壁の影！  
答へに（またとかへらない）

鴉は去らず、動かない、なほも動かす、立ち去らず、  
色青ざめた像の上、バラスの髪に爪をさす、  
悪魔の夢を夢みるかその眼の深い輝やきよ  
彼の姿は床の上影黒々とよごれたる  
ゆれるその影、その影を我が魂よのがれるか  
あらず——またとかへらない、

### ウラリユーム

どちらの空も灰色にくすんでをつた  
木の葉は皺しわばみ、ひからびてゐた——  
木の葉は枯れて、ひからびてゐた  
十月のさびしい一夜のことである  
私には一番記憶のうすい年  
ラーベルの仄暗な湖にほど近く  
（けはしさ）の霧立ちこめる國のなかほど——  
オーベルの濕地を下りて行つたあたり  
（けはしさ）のグールが住んでる森のなか、

そこへは一度チタニック小徑をぬけて、

靈と一緒にそこへさまよひ込んだ——、

サイプレス小徑をぬけて、シイス私の靈と、

その頃は私の心は火山の様子、

焼石の河は流れて——

熔岩はひまなくめぐる、

流黄にみちた流れは下る

極地の世界のヤアネックから——

それは唸る山からめぐり降りながら

ヤアネック、北の極ての王國から、

私等の話ほとんがり、きびしかつた、

けれど思想は麻痺して、枯れてた——

十月かなんの月やら知らないゆゑ、

どの年のどの夜であつたか記憶がない

(おお、その年のすべての夜にまさる夜！)

私等はオーベルの暗いうみもおほえがない——

(そこへはかつてさまよひ込んだことはあるが)——

記憶にはないオーベルの濕つた沼も、

(けはしさ)のグールの住んでる森のことも、

さて、かうして、夜が終りになつたとき、

星の時計が朝を示し、

星の時計が朝を報せて、

私等の道のはてには、もうらうと、

流れのやうな光が産れた、

そこから不思議な新月が

一對の角をもたけた――

新月は金剛石のやうに輝く、

一對の角とともに、はつきりと、

私は言つた（月はそのダイヤモンドよりも温たかい）

嘆きの大氣のなかを彼女はまろひ行く、

ためいきの國に彼女は溺<sup>ほ</sup>れてゐる

彼女は涙のかわいた所をみなかつた、

頬の上から毒蟲は死にはせなんだ、

彼女はさては、獅子の星座を過ぎてきた、

私等に空の道をさししめし、

わだかまりない空の平和に、

獅子をおそれずやつてきた、

その輝やかな瞳によつて吾等をてらし、

獅子の座をこして昇つた

彼女の輝やく瞳のなかの愛により、

けれどシイスは彼女の指を空に上げ

言つた——(悲しいあの星を私は疑ふ——)

彼女の蒼顔、私は妙に疑へる

おお急げ！——私等とはばう！——

さまよふではない！——おとおとばう！——それがいい、)

おののきながら彼女はいふ、

翼が塵を掃くまでもおろしながら

苦痛にすすり泣いてゐた、

翼が塵を掃くまでもおろしながら——

悲しげに塵をはくまで、

私は答へた——(これは夢にすぎないのだ、

顫る光に吾等を立たせよ！

積る光に木浴ゆふをさせよ！

神話を語るがごときその光

(望み)とともに(美)のなかへ今宵は流れる——

見よ！ それは夜どほし空に蒔かれてゐる！

ああ私等はすつかり心頼するだらうその光には、

それは正しく私等を導くだらう

それが夜どほし空に光をちらしてからは、)

それで私は彼女を抱きキスをした。

彼女から憂ひをとつて了はうと——

そしてその痴疑や憂ひをとりのけた、

私等は見通しのさきを過ぎて

墓場の扉の傍で止つた、

ずつと昔の墓穴の扉の傍で、

私は言つた（書いてあるのは何か！ 妹、

古い墓の扉の上には？）

——（ウラリユーム——ウラリユーム）——妹は答へた、

（それは亡くしたウラリユーム、その室である！）

私の心は灰色となり、くすんできた、

木の葉が皺ばみ、枯れるやうに、

私は叫んだ——（しかと十月、

去年の今夜だ

私がかこへ、さまよふたのは、まよひこんだは——

恐ろしい荷をしよひ、私が此處へ下りたは、

その年のすべての夜にすぐれたこの夜、

ああどんなに悪魔がかこへ誘つたらう？

私は、はつきり思ひ浮べるオーベルの暗い湖を、

（けはしさ）の霧立ちこめる國のなかほど、

はつきりと私は浮べるオーベルの濕つた沼を、

(けはしさ)のゲールがすんでる森の世界を、)

アンニイゆるゑに

幸なりき！ 悪熱や苦患

消えうせぬ、

居つ立ちつ暗き病魔も、

つひには行きね——

『生』と呼ぶ悪熱はついに、

敗られぬ、

知りて吾れ嘆きぞ深し——

我が力焼けて落ちたり



我が肉はそがれ凹みぬ  
せんなくてただ臥しにけり、  
何かせん！ やがて吾れ  
なほよきを知る、

夢うつつ、生けるみたまか  
床に臥す吾れ、  
人あらば死すとやみらぬ、  
驚ろきてゆりもやすらぬ、  
床にふす吾れさへ知らず、

呻きあり、ためいきもあり、  
吟りあり  
すすり泣きあり、いまはなけれど、  
心のはたに坐せりしや、  
胸喰む動悸、  
心の奥に寝ねりしや、

病み患ひや胸の憂さ、  
慰みもなき傷心も、  
かつてわが狂せしほどの  
悪熱も消えてあとさへなかりけり、

その惡熱やかかつてわが、  
腦中焔の生と呼びにき、

なべてのなやみに優りたる

悪しき惱みもあとたえぬ

ああ怖ろしき惱なる

ナフタラインの河に向き

喝を呼べりし呪の情——

あらゆる喝を醫す水に、

吾れ唇をしたしけり、

魂ねむらする聲あけて  
噴きもいでたるその水よ、  
地下三尺の泉より  
地下三尺の洞より  
歌ひつ噴きし水なるよ、

おろかしき限りのさたよ  
ゆめ、口走らすことなかれ  
わが部屋のあな物憂しと、  
はたわが床の狭苦しとぞ、  
よし人ありて寝ねんとするも

他に横はる床ありや  
寝ねるからには、君もえらべや、  
かゝる床をば、よそにはあらじ、

わが靈ぞむき出しに、  
休らふ此處の快さ、  
過ぎにし夕の、はた朝の  
桃金嬢や薔薇など、  
盛りのさまも忘れはて、  
思ひみるべき様もなく  
心のままに休へり、

いとも靜かに横はり、  
ああ今靈は慰めり、  
己が身めぐる聖らなる  
三色堇や迷迭香  
そが香にぞ酔ひにつつ—  
うちまぢる三色堇や  
雅やかなの、はた美はしの堇草、  
清き極みの堇草、

幸多くして靈は臥しけり、  
數々の眞の夢や

アンニーが優美の夢に、  
ひたりつつ、肌にふれつつ、  
ああアンニーが髪にうづもれ、

アンニーはやさしきキスを、  
唇に、さらなる強き抱擁を、  
かくても吾れは快き  
眠りにこそは沈みけり、  
やさしき人の胸の上に、  
さらに沈みぬ胸の空より、

かくて光の消えし折、  
彼女は吾れを守りけり、  
彼女は吾れに怪我なかれ  
かく祈りつつ守りけり、  
天つ使の女王にぞ  
祈りつ吾れを守りけり、  
死せるにやはた生けるにや  
(彼女の愛を感じつつ)  
樽のうちに休へり、  
人みれば死すとや思はめ

われはただうつらうつらと  
寢所のうちに休へり、

(胸の上に彼女の愛を感じつつ)  
おみあらば死すとやみらめ  
われをみて、おそれやすらめ  
われをみて色っしなはめ

されどわが心輝やく  
星よりも天つみ空に、  
輝やけるあまた星より、  
わが心アンニイによりて耀やく、

わが心育ち尊くなる、  
アンニイの愛の光に——  
アンニイのつぶら瞳の  
耀やかな愛の光に、

## アナベルリイ

ずつとずつと昔のことに、

海のほとりの王國で、

一人の娘が住んでゐた、呼ぶ名によると、

アナベルリイ、

その娘、その娘にはなんにもなかつた

私と互ひにいとしがる外、

その頃私は子供であつた、あの子も子供、

海のほとりの王國で、

*Annabel Lee*

けれど互ひにいとしがつた、愛しがるといふのを超えて、  
私とそれからアナベル リイは、  
そのいとしさは空飛ぶ天使が、  
私とあの子をやいた程だ、

ずつとずつと昔のことに、そんなわけから、  
海のほとりの王國で、

風が雲から吹き起り、私の奇麗な、

アナベル リイを凍らした、

それであの子の家柄のよい親族が

私からあの子を離して行つて了つた、

墓にあの子をどち込めようと、  
海のほとりの王國のこと、

空でそんなに幸はせでない天使らが  
私とあの子をやいたのだ、——

そうだ！——それに違ひない（誰もが知つてゐる  
海のほとりの王國で）

暗い夜、雲から風が起つて、

こごえ殺したアナベル リイを、

けれど二人の心は、はるかに強かつた、

世の年老いた人のより——

世の賢こがる人のより——

空の高みの天使らも、

海の深みの魔物らも、

私の心をむしりとつては行けはしない、

私の奇麗なアナベル リイの心から、

月の光もさしはしない、私の夢が、

奇麗なアナベル リイを見なけりや、

星も昇りはしないだらう、私の瞳が、

奇麗なアナベル リイの瞳をみないなら、

冥  
想

それ故に夜、よ通しを私は横ふ  
いとしい——いとしい——私の命、私の誇の傍で、  
海のほとりの墓穴に、  
泣いてる海のほとりの墓に、



明  
星

夏の眞蒼か

眞夜中か

星輝やけり青ざめて

色青ざめて輝けり、

冷たく光る月光に、

あまたの星ぞ輝やけり

月はともをばひきつれて

己れを高く空に持す、

流れをぬらすその光り、

その冷たかる微笑みを、  
眺めてあればああさらに、  
心も靈も冷えはてぬ、  
折しも雲の一ひらや  
死者の衣に似て飛びぬ、  
かくてぞおみをかへり見る  
姿け高き明星よ、  
遠き玉座の金星よ、  
おみの光ぞなつかしし、  
空にけ高きおみをみる  
吾れが心ぞ夜にして

よろこびにこそ輝かし  
冷たく低き光より、  
さらにはるけき明星よ、  
おみを讃えん、いやさらに、

## スタンザス

どんなに多くの時のすべてを、

忘れて了ふことだらう、氣高い自然の世界の冠、

その森——その野——その山——彼女の烈しい答、

——吾等の知性につけられる！

——バイロン、アイランド——

青春のとき知つた『人』——彼の人は『地』と共にあり、

秘密のときに、彼れ、地とともに——腕交しつつ、

白日のとき、美のときに、彼の生れた始めより、

燃え立ち、焼けた彼の命の松明は

陽から、星から降りたもの、情熱の光明こそは、

彼がそこより捕りしもの、——靈故に來りたる、

——だが靈は自らの熱を病むときには知らない、

それ以上力のあるは何だかを、

## 2.

大空から漂ふてくる月の光を浴びたなら、

吾が靈も悪熱を病むかも知れない、

だが半ば、信じるだらう、野の光明は、

よく語られた昔の教へをもちこえた、

力に充てるを、さては思想の表はれない心であるか、

今は瞬く休みのときを飛び散らせ、

夏草の夜露の露のそのやうに？

3.

吾等が上を過らせよ。愛するものに見はる瞳か、

——眼瞼を離れる涙であるか、

——おそくまで不覺のうちに眠つてゐるたる？

命のなかに、もはやかくれてゐるに至らぬ、

けれど凡俗、横はりてあれ、いつまでも、

かくてたゞ、お身は響け、不思議の調に、

破れた琴のつるのやう吾れをさませ——それはシンボル、記號で

ある、

4.

他の世界に生れるさだめの人やさて、

吾等の神に、美に住むことを許された人、

彼等はまた、命から、空から降つてくるだらう、

彼等の心の情熱や、響によつて、

かくて、信なく神なくて、あがいた靈の

氣高い調べをかきならず、——

彼等の冠、それは望みのたえた力に破れはて、

王冠に似て、自らの深い思ひをよそほひつ、

## 湖 (ある人に——)

青春の泉にあつて、私の運命は、  
廣い世界にある場所をさすらうたこと、

——それは、どうしても愛せずにおれない所の——  
そんなにも愛すべき野の湖の、

淋しさだつた、黒い岩の帯を締め、

脊高の松でテイテイとかこまれてゐる——

けれど『夜』がその墨の衣を投げると、

凡てのものにかけるやう、そこもすつほりかぶるとき、  
魔性の風が吹いてきて

さわさわさわと音をたて、

ああ、さわさわと、それ故に、私は眼覺める、  
寂しいうみのものおちに、

けれどもそれは、身の毛のよだつものではなかつた  
ふるへるよろこび——

ある感情、わたしに心定めさするには、

寶石も愛も、ものとはしない感情——

たとへ愛がお前にあつても、

『死』は情熱の波にあつた

その淵には彼れの爲めの、  
墓場があるから、彼の淋しい、  
もの思ひには慰めがある、  
彼の孤獨の靈は、ほの暗い、  
その海にエデンをつくる、

### ソンネツト (科學に——)

アル、アラフのプロログ

科學よ！ お前は『古い月日』の眞の娘だ！  
誰であらう、すべての物を變へるのは、お前の光る瞳でもつて、  
何故か、詩人の心の上にこんなにもしてお前はむさほる、  
ブルチユール、その翼こそ、にぶい實だ？  
人はお前をどんなに愛する？ はたどんなにか慧しく思ふ、  
お前は彼を離れはしない、寶石を藏した空へ、  
寶を求めに彼がさ迷ひ出るときも、  
元氣な翼で高く高く舞ひ上つたとて？

お前は月を彼女の寢間からとりはしない、  
また森からハマリアッドを追ひはしない、  
どこかのたのしい星へ住ひを求めに行けと？  
またナイアドを出水の場所から捕へはしない、  
緑の草からエルフィンを、はた私から  
羅帽子の下の夏の夢をも？

## ロ マ ン ス

ロマンスよ、お前はうつら、うつらの眠り、歌をよろこぶ、  
ものうけに首を傾け、翼おさめて、  
緑葉のなかにそれ等が、  
とある影さす池に遠くゆれおちるとき、  
いろ美しい小さな鸚鵡は、  
昔よりあり——私に極くなつかしい鳥——  
私に私のアルファベットを語るを教へ、  
私の最も最初の言葉をきれざれ知らせる、  
野の森に私が静かに伏してゐるとき、

子供となつて——その小慧しい眼をみはり、

近頃、永遠にすりへつて行く年々を、

高見の空はひどくゆれる、

かの夕立ちのすぎさるとき、

私はむだな愛撫の時をもち合せぬ、

おちつきのない空をぢつと見入るとき、

さてある一時、静かな翼が

冠毛を私の魂におとすとき、

七絃琴やまた詩<sup>うた</sup>とともにわづかの、

時が行く——堅く塞した、

私の心は罪を感じることはできない、  
糸をゆすぶり、それが鳴つてゐるときは、



## 河へ――

美しい河！ 水晶の輝やく清らな、  
流れよ、さまよふ、水のなかには、  
成長の記號がみえる

美の、さて、心の露はなさまの、  
あるひは老ひたアルベルトの姫、  
彼女にみえるたはむれ多い技わざのうねり、

かの娘、波を見入れば、  
輝きらやきつ、ゆらら、ゆららに、

彼女を讃める極みの書物の、  
可憐の果てに似もするよ、  
いかにといふか、お身の流れに、彼女の心に、  
彼女の心象イマヂは深く横ふ――  
その心、靈たまを求め、  
瞳の光に上にゆれたる、

## コリシユム

いにしえ、ローマの典型よ！ 高貴の怨うらみの  
豊かな倉は『時』に残る、

美と力、その埋められた時代ゆえに！

遂に——つひに——長い長い月日の後に、

つかれ果てた順禮の、燃える、かわきの、

(お前のなかに横はる古代の泉を飲まうとする)

私は膝おるあはれな祈りの一人となる、

お前の影のなかに座し、私自身の魂の、

なかにお前の榮を、美を嘆きをのむ！

茫漠たるよ！ 年月よ！ 古代の記憶よ！

沈黙よ！ 寂寥やはた仄暗き夜！

今にして、お前をさとり——お前の力に——

おお語れ、よく強く、かのユダヤの王にもまさり、

ヂエンスメンの園のなかで教へしよりも！

おお強く魅惑せよよ恍としたカルデーよりも、

かつて露をかのひつそりした星よりとつた！

ここ、このあたり、英雄たほれ、柱はたほれる！

ここ、このあたり、まねごとの鷺は高鳴く、黄金のなかに、

真夜中の祈念はいたく黒すむ蝙蝠！

ここ、このあたり、ローマ夫人は金髪を、  
風に波立つ今はたアシやアザミを渡る！

ここ、このあたり、黄金の王座に、王凭りかゝり、  
いま迂り行く幽霊のすがたにも似て、

大理石の部屋にかくれる、満月のサンたる光に  
石の上にすばやい静かなトカゲのさまか！

だが止まれ！ これらの壁、蔦まく街路——

こはれかゝる胸像柱——いたましい黒すむ箭幹、  
影うすい長押や——さては壊れる小壁、

ゆるむ蛇腹——これらの破壊——この廢墟——

ああ——これらの石！ 灰色の石——すべてはこれ、名聲の大い  
なもの、

運命と私に残る腐れ朽ちゆく月日ゆえにか？

(さばかりも)——こだまがかへる——(さばかりも  
瞑想の聲高い響はあがる、永久に、

吾等から、また廢墟から、賢者にまで、  
メノンより太陽に行くうたに似て、

吾らはめぐらす、力強い人の心を——吾等めぐらす、  
私等は虚弱ではない——我等は石をひしぐ、

私等の力はちつとも去りはしない——私等が名譽も、

私等の高い聲價の魅力とても——  
私らをとりまく多くの驚異もさては、  
私らのうちに横ふ不可思議も、  
私等をのほり、垂れる記憶のかすかず、  
光榮より、より以上優れた着物に吾等をつつみ

### 讚美歌

朝に——午ひるに——薄ら明りの夕暮れに、  
マリアよ、おみは、私の讚美の歌をきいた！  
歡びに、はた悲しみに——快さにさては痛みに——  
神の母よ、いまでも私と、ともにあれ！  
『月日』がサンと輝やきながら飛び去るとき  
そして雲が空をかくしはしないとき、  
私の心が怠惰な夢をみないため、  
おみの優美は、それを、おみに、おみのものへと導いた、  
さて『運命』のあらしが私の

「過去」を「今」を暗く覆ふ了ふとき、

私の未來をコウコウとてらさしめよ、

おみのまた、おみのものなる甘やかな望みによつて！

### ゼエントに——

麗はしい鳥、花々の極みの奇麗な花により、

やさしさの極みのやさしい名を得たお前、

お前やさてはお前のものをみれば忽ち、

ああ輝やかしい年月の数限りない記憶がかへる！

ああどんなにか、去つた恵みのかすかすの場が！

ああどんなにか、埋もれ果てた望みの思ひの数々が！

ああどんなにか、一人の少女のかすかすの夢幻が

それは、もうもう歸らない——かへらないお前の緑のスローブ  
に！

かへりはしない！ あああ、ありとあるものを變ずる  
悲しい魔術の響であるよ！ お前の魅力はもう充されぬ——  
お前の記憶はもうかへらない！ それ故にのろわれた地と  
お前の花のやきつけられた岸を見る  
ヒヤシンスの島！ おお紫のゼエントよ！  
（黄金の島よ！ 東方の國の花よ！）

## 婚禮の唄

指環は私の指に光り、  
花環は私の額にかかる、  
盛んなサテンや寶石は、  
すつかり私のものとなる、  
かうして私は幸の身よ、

私の夫は心から私をもてなす、  
けれど最初に、夫の誓をきいたとき  
私の胸はいたんでゐた——

悪いしらせの鐘のやうに聞えたから、  
聲の響が戦ひで谷に沈んだ、  
あの人の聲の響に似てゐるから、  
あの人はいま幸ひである、

私の心を静かにするため、

夫は語り暗い額にキスをした、

夢みごこちが私をよぎり、

私は寺の庭へついた、

私は前に夫のゐるのを見て吐息した、  
夫が死んだデロームイに見えたから、

(おお、私は幸ひだ！)

——こんな言葉がつつぱしり、  
結婚の誓がかうして語られた、  
たとひ私の信心が破れようとも、  
私の心がきづつけられるも、  
この黄金の印しるしをみよや  
これは私がいま幸ひであるのを語る！

神よ、私は醒めるように！

私の心はどんなになるやら判らない夢をみてゐる。

靈はひたすら、おののく、  
魔性が歩みよつたならと、  
棄てさらされたあの人が、  
いま幸ひでないのならと、ことによつたら、

## 沈黙

ある性質——ある合體のものがある  
二重の生をそれはもつ、光と物から、  
生れた一つの實質の一個の型は、  
かうして出来て、凝固と影陰かげかげに現はれた、  
そこに二つの抱き合つた『沈黙』がある——海と岸——  
肉と靈と草が新らたに生ひ茂る寂しい場所に住むものが、  
嚴かな優美とともに、  
人間の記號とともに、さては涙にみちた教へを、  
恕れはなしに彼にすゝめる、彼の名前は『ノーマア』



彼は合體した沈黙だ、彼をおぢるな！

彼は身うちに、悪魔から力を得てゐはしないけれど、

ある足早やな運命が（思ひかけない悪運）が、

さては君をば、彼の影に會はせようとて（寂しい場所）へつれて  
行く、

（そこには名のない悪魔が住んで、人の足の、  
踏も見えない）そこでは君は神にまかせよ！

## ユーレリイ

私は住んでた、

悲しい世界に、

私の心は流れない潮であつた

あの美しい、氣立てのやさしいユーレリイが氣はづかしい、

私の嫁になつたまでは——

黄金こがねの髪かみの年若なユーレリイが微笑こがねみがちな

私の嫁になつたまでは。

ああちつとも、ああちつとも、

光りはしない、夜の星も、

あの輝やかな乙女の眼よりは！

紫や眞珠色の

月の光で霧が拵へる

一片雲も、

あの美しいユーレイのうつつちやらかしの

まき毛におとる

あの明眸のユーレイのまことに質素な、

かまひけない、まき毛に負ける、

疑ひも、——さては嘆きも、

もう來はしない、

彼女の心が私に吐息の吐息をしたから、

日がな一日

輝やきつ、てらしつ、力く、

空の月は、いつまでも、さて、

あの愛らしいユーレイはその妻らしい瞳をあける——

あの年若なユーレイは心すずしい瞳をあける、



溶けた黄金の調から、

しらべそらふて

歌はどんなに浮きつ流れつ、

かたむく耳に流れ入る

班鳩しらこぶ、月を見つめるその耳に！

おお鳴りはためく穹窿からか

數多しらべのよい音があふれ出るか！

どんなにまろぶか！

どんなにまろぶか

(未來)の上に力ある、

ベルが響くよ、鳴るよ、響くよ

鳴るよ、渡るよ、鳴るよ、渡るよ、

鳴るよ、鳴るよ、走るよ、走るよ、

鳴るよ、鳴るよ、——

響くよ、響くよ、ベルが響くよ！

3.

聞けよ夢をふるひ落す高鳴りのベル——

眞鍮のベル！

いまどんなにか、物凄い物語りをばベルはする打ちさわぎつつ！

夜のおどろける耳に響く、

彼等の物おち、どんなに叫ぶことであるよ！

語るにはおそろしすぎて、